

行事場面における保育行動の特性

森 倫子・七木田 敦
青 井 倫子・廿日出 里美
(1991年9月30日受理)

An analysis of teacher behavior in events activities of nursery school

Shigeru Mori, Atsushi Nanakida
Tomoko Aoi, and Satomi Hatsukade

The purpose of this study was to analyze the mutual interactions between teachers and children in annual events activities of nursery school (yōchien) comparing with play activities.

A systematic observation method was adopted in this research. The authors especially devised two kinds of observation categories to check (1) active behaviors of a teacher on young children, (2) responsive behaviors of the teacher to their active behaviors. Annual events, including with "the short trip", "Onigiri (rice ball) party", "Mochitsuki (rice-cake making)", "Yakiimo (baked sweet potatoes)", and "presentation of singing songs, dancing, and operetta. etc.", were conducted to observe the behaviors of the teacher and children.

The following are the main results;

1. Compared with play activities, the teacher's behaviors were inclined to directive in events activities. In some events activities that had less strict in schedule, the teachers behaviors were inclined to supportive.
2. Supportive behaviors of teacher, such as praise, suggestion, approval, etc, fostered the independent, supportive behaviors and active interactions among children in events activities.
3. Some modifications of the content of events activities, such as less restricted environment and more freedom in schedule, will draw out and develop children's independent and spontaneous behaviors.

研究の視点

1. 「行事保育」検討の必要性

わが国の幼稚園・保育所では、保育活動として、いわゆる「行事」が頻繁に行われている。4月の入園式に始まり、3月の卒園式まで、「行事保育」と呼ばれるくらい、まさに行事の連続の感がある。保育者も園児も、行事を追いかけ、行事に振り回されて一年を終わるといった園さえある。たしかに行事は、幼児に家庭とは違った豊かな生活体験を与えるうえで重要な意味をもっている。行事の教育的意義としては、①クラスや園を集団として高めていく、②家庭や地域との交流をはかる、③年中行事や啓蒙的な社会行事を体験させるなどを挙げることができる。

しかし、実際行われている行事の中には、上に述べ

た良い面よりも問題を含むものの方が多い。例えば、保育の中に位置づけられるべき行事が「行事保育」と呼ばれるように、行事を次々とこなすことによって保育が成り立っている場合がそうである。また、いままでのカリキュラムが伝統的な年中行事や歌や踊りを中心としたものにかたよっているという指摘もある。家庭の代行として行事を行なうのではなく、もっと現代社会の生活に密着したテーマを、幼児にふさわしいようにカリキュラムに組みこむべきだという提案もある¹⁾。

このような批判の対象となる行事保育の問題点は、次のような点にある。

①競争主義²⁾——集団や和を強調しすぎたり、集団間やクラス間の競争を助長する。その結果、厳しい練習を強制されたりして登園拒否になったり、劣等感に

陥る子どもがでてくる。

②見せ物主義——親や観客にとって見栄えのよいものに走りやすい。その結果、練習や打ち合せに多大の時間と労力が費やされる。そのため、子どもの生活や感動からかけ離れたものになり、行事の間は、静かにすること、お話を聞くこと、きちんと列に並ぶなどのきまりごとを守ることばかりに注意が払われる。

③マンネリ化——行事が定型化され、子どもの日常生活とかけ離れたことが行われる。保育者は、子どもたちの毎日の生活を見つめるよりも、行事のスケジュールをこなすことの方に神経を費やす。

このような保育では、いずれも保育者が幼児に対して統制的で管理的な保育行動をとることが、十分予想される。保育者が中心になって権威的に進めるような行事は、せっかく教育的な意義があっても、本来のねらいが達成されているかどうか疑問である。これは基本的に検討を要する問題だといえよう。

2. 今回の研究の目的

上に述べたような問題意識から、行事場面における保育者の保育行動が日常の保育行動に比較してどのような特徴を持っているのかを明らかにすることが、今回の研究の目的である。これまで、行事に関する先行研究がいくつかみられる³⁾。しかし、これらの研究は、行事の内容に関する調査が主で、実際の保育者の行動を問題にしてはいない。本研究は、保育者の行動特性に焦点をしばり、その問題点を明らかにしようとする。その際の仮説は、行事場面における保育者の行動は、行事の進行や結果に気をとられるあまり、子どもの興味や関心を受容する余裕がなく、命令的・権威的になりやすいということである。さらに、先行研究では、保育者の態度が遊びにおける子ども間の態度に影響を及ぼすことはすでに明らかにされているが、行事場面においても保育者の態度が子どもの活動に何らかの影響を及ぼすことが予想される⁴⁾。以上の仮説を明らかにするために、行事の種類、自由遊び場面、及び園別の比較をとおして、行事場面における保育者の行動様式を組織的観察法を用いて実証的に検討し、その特性を明らかにすることが本研究の目的である。

方法

1. 観察・記録方法

研究方法は、主として組織的観察法を用い、保育者と幼児の行動を、現場で直接観察・記録し、それをもとに客観的に分析評価を行なった。観察にあたって、保育者と幼児との相互作用を観察するための2種類の

カテゴリーを使用した。各カテゴリーの内容を以下に示す(これらは、森ら(1981)⁵⁾の研究で使用されたものと同じものである)。これらのカテゴリーを用いて、同一場面を同じ時間観察し、記録した。

(1) T-C(保育者-幼児)カテゴリー(表1)

保育者(T)が幼児(C)にどう働きかけ、幼児がそれにどう反応するかを観察するためのもので、保育者のリーダーシップの特徴を「統合-支配」の軸でとらえている。また、保育者からの働きかけの形式を「与える」と「求める」に分けた。「与える」とは、保育者の意見や考えを幼児に投げかける働きかけをいい、「求める」とは、幼児の意見や考え、行動を引き出す保育者の働きかけをいう。

(2) C-T(幼児-保育者)カテゴリー(表2)

保育者に対する幼児の働きかけと、それに対する保育者の反応を観察するためのもので、保育者に対する幼児の態度を「自立-依存」の軸でとらえている。

以上のカテゴリーを用いて観察・記録するのであるが、記録にあたっては、単に言葉のみで判断するのではなく、前後の文脈や状況を考慮して記録を行なった。したがって、同じ言葉であっても、異なるカテゴリーに分類されることもある。

また、保育者と幼児の相互作用の観察記録以外に、行事場面において特徴的と思われる保育者や幼児の言葉や行動を随時記録した。

2. 分析のための指数

(1) 保育者の行動様式分析のための指数

各公式の分母、分子のアルファベットの箇所には、その文字に対応した各カテゴリーの頻度数を代入する。

【保育者の行動様式分析のための指数】

●T-Cカテゴリーを用いて、保育者から子どもへの働きかけの内容および様式、頻度を明らかにする。

$$\textcircled{1} \text{統合/支配比} = \frac{(A)+(B)+(C)+(D)}{(F)+(G)+(H)}$$

保育者がどの程度幼児の意見や考えを尊重し、まともていこうとしているかをみる。

$$\textcircled{2} \text{求める/与える比} = \frac{(A),(B),(C),(D)の「求める」の総和}{(A),(B),(C),(D)の「与える」の総和}$$

保育者がどの程度幼児の意見や考えを引き出すようにしているかをみる。

●C-Tカテゴリーを用いて、幼児からの働きかけに保育者がどのように反応しているかを明らかにする。

$$\textcircled{3} \text{自立的働きかけの受容} = \frac{(A),(B),(C)の(d)+(e)の総和}{(A)+(B)+(C)}$$

幼児の自立的な態度を保育者がどの程度受け入れているかをみる。

$$\textcircled{4} \text{ 自立的働きかけの拒否} = \frac{(A), (B), (C) \text{ の } (b)}{(A) + (B) + (C)}$$

幼児の自立的な態度を保育者がどの程度拒否しているかをみる。

$$\textcircled{5} \text{ 依存的働きかけの受容} = \frac{(F), (G), (H) \text{ の } (d) + (e) \text{ の総和}}{(F) + (G) + (H)}$$

表1 T-Cカテゴリー

(保育者→子ども相互作用観察用)

保育者の働きかけ		子どもの反応	
	与える	求める	
(A) 賞賛・励まし 支持・共感			(a) 無反応
			(b) 受容
			(c) 発展的受容
(B) 示唆 助言授教			(a) 無反応
			(b) 拒否
			(c) 受容
(C) 承許 認可			(a) 無反応
			(b) 拒否
			(c) 受容
(D) 提勸 案誘			(a) 無反応
			(b) 拒否
			(c) 受容
(E) 説明・指示 確立的発言			(a) 無反応
			(b) 拒否
			(c) 受容
(F) 命令・禁止 指図			(a) 無反応
			(b) 受容・服従
			(c) 反論・抗議
(G) 注叱責・非難			(a) 受容
			(b) 無視
			(c) 抗議
(H) 脅迫 体罰			(a) 受容
			(b) 拒否
			(c) 抵抗

< T-Cカテゴリーの具体例 >

- A-「与える」 「じょうずにできたね」「わあおいしそう」
- A-「求める」 「みんな、○○ちゃんすごいことしてるよ」
- B-「与える」 「こうやったらうまくできたよ」
- B-「求める」 「どうしたらいいかな」
- C-「与える」 「どこに座ってもいいよ」
- C-「求める」 「○○ちゃんもやりたいんだって」
- D-「与える」 「二つ歌うから好きな方を覚えようね」
- D-「求める」 「次はどれにしようか」
- E-「与える」 「今度ほかがみもちよ」
- E-「求める」 「次はどうするんだったかな」
- F-「与える」 「ここに座って遊びなさい」
- F-「求める」 「手を洗わないとできなくなるよ」
- G-「与える」 「違う！○○君」
- G-「求める」 「あら、どうして音がするんでしょう」
- H-「与える」 「先生怒りますよ」
- H-「求める」 「ちゃんとできない人は返してもらいますよ」

(注1) A~H…働きかけのカテゴリー

(注2) 発展的受容…幼児が保育者の働きかけを単に受け入れるだけでなく、自分でさらに工夫したり考えを出したりする場合に記録する

幼児の依存的な働きかけに対して保育者がどの程度受容的であるかをみる。

$$\textcircled{6} \text{ 依存的働きかけの拒否} = \frac{(F), (G), (H) \text{ の } (b) \text{ の和}}{(F) + (G) + (H)}$$

幼児の依存的な働きかけに対して保育者がどの程度拒否的であるかをみる。

表2 C-Tカテゴリー

(子ども→保育者相互作用観察用)

子どもの働きかけ		保育者の反応	
		(a) 無反応	(b) 拒否
(A) 賞賛・励まし 支持・共感		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
(B) 提案		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
(C) 発展的な援助 を求める		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
(D) 中立的発言		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
中立的質問 (E) 説明・意見・ 確認を求める		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
(F) 承認・許可 を求める		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
(G) 訴え・依頼		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
依存・甘え・ (H) 自己顕示的行動		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容
		(e) 発展的受容	
		(a) 無反応	(b) 拒否
		(c) 条件付き受容	(d) 受容

< C-Tカテゴリーの具体例 >

- A 「先生がんばって」
- B 「手に粉をつけたらいいよ」
- C 「もっと大きいスコップを出して」
- D, E 単純な説明, 挨拶, 質問など
- F 「先生, お茶飲んでもいい?」
- G 「僕らが使ったのに○○君がとるんよ」
- H 「先生, 抱っこ」

(注1) A~H…働きかけのカテゴリー

(注2) 発展的受容…保育者が幼児の働きかけを単に受容するだけでなく、「○○ちゃんはいいいことを言ったよ」とか「そうだね, そのほかにもこうするといいよ」と発展的に返す場合に記録する。

【幼児の行動様式分析のための指数】

●C-Tカテゴリーを用いて、幼児から保育者に対する働きかけが自立的か依存のかをチェックする。

$$\text{⑦自立/依存比} = \frac{(A)+(B)+(C)}{(F)+(G)+(H)}$$

3. 観察の手続き

観察対象は、東広島市内の国立A幼稚園年中組(1クラス29名)並びに広島市内の公立B保育園年中組(2クラス34名)の担任とその園児たちである。

観察期間は、1990年11月~12月で、行事に関連する活動時間(行事、および行事の練習)と自由遊び時間における保育者と幼児の行動を観察記録した。対象とした行事の内容は、遠足、おにぎりパーティー、やきいも、もちつき、生活発表会(練習および発表)である。

結果と考察

行事場面における保育者の行動特性を明らかにするために、本研究では「保育者からの働きかけ」と、それに対する「幼児の反応」を、それぞれ行動様式分析のための指数を用い、(1)行事の種類による比較、(2)自由遊び場面との比較、(3)異なった2つの園での比較を通して検討した結果、以下のことが明らかになった。

1. 行事の種類による比較

幼稚園・保育所の行事は、幼児の生活に潤いと変化をもたらすことにより、幼児の生活経験を深めるために、保育カリキュラムのひとつとしてなくてはならないものと考えられている。そのため行事への参加形態、行事の規模なども行事の種類によって多様であり、そこでの幼児に対する保育者の働きかけにも通常の保育と異なった配慮が必要とされる。

本研究で観察の対象となった行事の中で、「発表会練習」「遠足」などは、「おにぎりパーティー」、「やきいも」、「もちつき」よりも比較的行事のスケジュールが細かく具体的であった。時間に拘束されるような活動スケジュールでは、一般に保育者が管理的になりがちである。このことは、「発表練習」、「遠足」などの行事場面において、保育者の働きかけがより「支配的」になることからいえることであった(図1)。

一方、幼児の創意工夫が生かせ、また幼児の活動の自由度が高い「おにぎりパーティー」「やきいも」「もちつき」といった行事においては、保育者がより「統合的」に子どもに働きかけていることが観察された(図

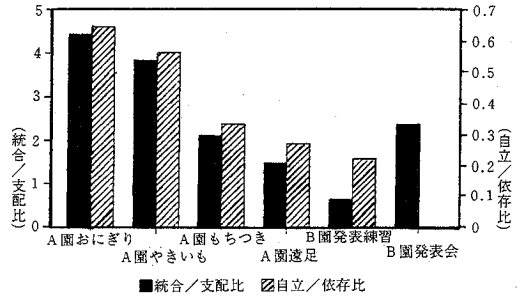


図1 行事場面における統合/支配比と自立/依存比 (各行事の比較)

1)。このように保育者の働きかけの違いが幼児の行動にも影響を与えていることは、先行研究でも報告されている(森ら, 1981)⁴⁾。本研究においても、保育者が「統合的」である場合(例:おにぎりパーティー=4.44)は、幼児は「自立的」(例:おにぎりパーティー=0.64)、一方、保育者が「支配的」である場合(例:遠足=1.42)には、幼児は「依存的」(例:遠足=0.27)であるという傾向(図1)が認められた。これは、森ら(1981)⁴⁾が指摘するように、わが国の子どもは、すでに幼児期にして権威に従順である日本人の特質を身につけていることを意味しているのかも知れない。

近年保護者を対象とした保育参観の一環として、「生活発表会」のための集団体操や音楽劇を指導する幼稚園、保育所が増えてきている。保育者の側からみれば、このような活動は、クラスをまとめあげることなど保育者の力量が問われる行事のひとつでもある。そのため保育者が、個々の子どもに具体的に働きかけるよりも、子ども全体に支配的に働きかける統制的な行動をとることが予想された。観察の結果はこの予想を裏づけるものであった。特筆すべきは、このような状況下では幼児からの反応が皆無であることだった。幼児と保育者との有機的なかわり合いを保育の基本と考えるなら、「生活発表会」は子どもの不在の保育になりやすいといっても言い過ぎではなからう。現在われわれは、行事保育研究の一環として、国公私立幼稚園に通園する幼児を持つ1,400人の保護者を対象に、行事に関するアンケート調査を実施中である⁶⁾。それによると、親が参観したい保育場面として、「自由に遊んでいるところ(47%)」、「日常の生活場面に即した活動(50%)」の希望が高い。近年の「生活発表会」の過熱傾向に対しては、親さえも疑問を感じていることが伺える結果が出ている。

2. 自由遊びの場面との比較

行事場面と自由遊び場面での保育者の働きかけの特性を図2に示した。自由遊び場面と比較して、行事場面では保育者が、幼児に対してより顕著に「支配的」に働きかけていることが2.97という低い「統合／支配比」からわかる。また、その働きかけの様式も、「求める／与える比」の低さで見られるように、保育者の意見や考えを、直接幼児に投げかけるといった特性がみられた。また保育者の反応でも、自立的な幼児からの働きかけに対して拒否する割合が高く（行事場面＝0.43、自由遊び＝0.0）、幼児からの働きかけに対しても効果的な反応が少ないということが示された（図3）。この点については、本研究の仮説、すなわち行事場面における保育者の態度は命令的・権威的になりやすいということは支持されるかも知れない。しかし、この仮説はすべての行事について妥当するわけではなかった。例えば「おにぎりパーティ」で保育者の行動は、自由遊び場面での行動に匹敵するほど、幼児の自立的行動を促していること（おにぎりパーティ＝0.64、自由遊び＝0.83）がわかった。このことは、幼稚園・保育所の行事は、自由遊び場面よりも保育者主導で実施される傾向にあり、そのため幼児の行動も依存的になりがちであるが、行事のスケジュール、あるいは保育

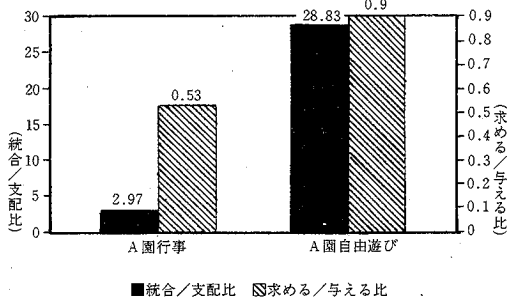
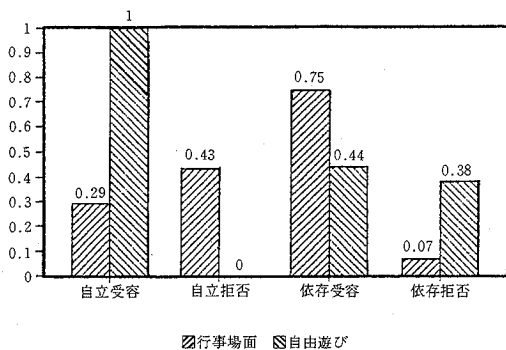


図3 行事場面と自由遊び場面の保育者の反応



者の配慮によっては、幼児の自立的な行動を引き出すことも可能であることを示唆している。

3. 異なった2つの園での比較

行事に対して、異なった園の保育者がどのような働きかけをしているのかを比較した結果を図4に示した。A幼稚園は自由保育をモットーにしているが、B保育

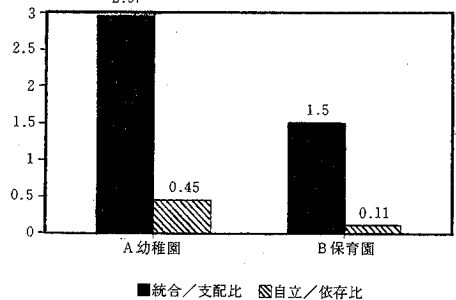


図4 行事場面における統合／支配比と自立／依存比（A幼稚園とB保育園の比較）

園ではいわゆる設定保育を主な保育形態として実施している。A幼稚園では、B保育園よりも保育者の働きかけが「統合的」である傾向が顕著で、幼児の自立性を受容する割合も高かった（A幼稚園＝0.42、B保育園＝0.29）。一方、B保育園では保育者の働きかけが「支配的」で、幼児の依存性を受容する傾向があった（A幼稚園＝0.51、B保育園＝0.75）。またA幼稚園の保育者の方が、B保育園の保育者より幼児の自立的活動を促す傾向にあった（A幼稚園＝0.45、B保育園＝0.11）。さらにこのような保育者の働きかけの特性は、A幼稚園で幼児が「自立的」に保育者に働きかけ、B保育園では幼児が「依存的」に保育者に働きかけるといった幼児の行動特性を引き出ししているとも考えられる。

さらに図5は、森ら（1981）⁴⁾による先行研究との比較であるが、その結果、行事場面だけでなく自由遊

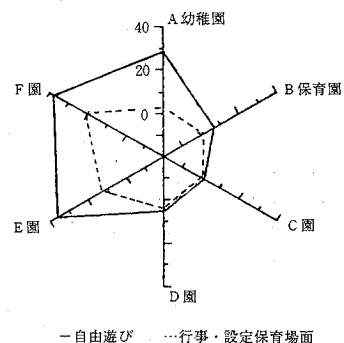


図5 6つの幼稚園・保育園の統合／支配比の比較

び場面においても、保育者が「統合的」に幼児に働きかけると、幼児の行動が「自立的」になるという傾向があることが認められた。保育者の行動特性には、園の保育方針や保育形態だけでなく、保育者自身の個性も影響していると考えられることから、この点を実証的に明らかにすることが今後の課題となった。

要約

本研究の目的は、行事場面における保育者の行動特性を組織的観察法を用いて明らかにすることにあった。結果から、次の3点が明らかとなった。

(1) 自由遊び場面に比較して、行事場面では保育者の働きかけは「支配的」になりやすく、幼児の「依存的」な反応も多くなる。

(2) 保育形態として設定保育を取り入れている園は、自由保育を取り入れている園よりも行事場面ではより「支配的」になりやすい。

(3) 行事場面にも、幼児の創意工夫が生かされるような保育者の配慮があれば幼児の自立性が出てくるので、行事の内容及び進め方を工夫する必要がある。

行事の教育的意義を保育に生かすために、親との提携は必要不可欠である。そのため親の行事に対する考え方を明らかにすることは、従来の幼稚園・保育所主導の行事を再考するうえで有効であると考えられる。今後、この点を実証的に検討していく予定である。

註

- 1) 莊司雅子：『幼児教育学』柳原書店、1985年、258頁。
- 2) 森嶽他編：『運動保育の進め方』明治図書、1984年、169頁。
- 3) 例えば、小林由憲「保育行事についての調査研究」『保育学会発表論文集』1987年、216-217頁、谷田貝公昭「合宿保育について—保育学会を中心に—」『保育学会発表論文集』1988年、284-285頁など。
- 4) 赤塚徳郎・森嶽他：「保育者の行動特性と幼児の集団行動との関連」『広島大学教育学部紀要』第1部、第30号、1981年、133-152頁。
- 5) 赤塚・森他 前掲論文。
- 6) 森 嶽・七木田敦・青井倫子・廿日出里美「親の幼児教育意識の構造—幼児教育観と園行事への参加意欲との関連を中心に—」広島大学教育学部附属幼年教育研究施設『幼年教育研究年報』第14巻 1992年。